

IBADAIVERS

多彩な者たちが学び、行き交い、探究している茨大のキャンパス。茨大広報学生プロジェクト&広報・アウトリーチ支援室&茨城在住の編集者が取材した“イバダイバース”の世界、ちょっと覗いてみませんか。

No. 6
JULY 2026

特集

高度専門人材を育み 地域社会へと 送り出す使命。

【特集】高度専門人材を育み 地域社会へと送り出す使命。 新学長 佐川 泰弘が語る、茨城大学の教育の展望	2
地域で輝く卒業生を職場に訪ねて 石巻市博物館 学芸員 泉田 邦彦さん 株式会社神戸工業試験場茨城試験課 大戸 桜子さん 国立研究開発法人日本原子力研究開発機構 原子力科学研究所 工務技術部 野澤 拓也さん 緑桜学園那珂市立第三中学校 教諭 出羽 拓真さん	4

IBADAI Chocolate Project

阿見キャンパスで実を結び始めた、インドネシア産カカオの 付加価値向上と地域産業の持続を目的としたチョコレートづくり	8
--	---

【コラム】アカデミアIBADAI 研究に恋して 基礎自然科学野 准教授 小林 優介	10
イバダイと地域力 水戸市街地 × 茨城大学＝「まちのイバダイ」	11
【茨大広報学生プロジェクト編集ページ】 全力！茨大サークルライフ！	12
茨大ほっとステーション	13
先生、ちょっといいですか？ ～茨大教員の素顔を調査！～	14
茨大関連施設にDIVE！	15

【コラム＆ニュース】 つながるイバダイバース IBADAI NEWS UPDATE	16
--	----

【特集】

高度専門人材を育み 地域社会へと送り出す使命。

新学長 佐川泰弘が語る、茨城大学の教育の展望

狭い意味での専門分野の
学びにとどまらず、他分野
の学生や社会人との関わり
の中で俯瞰性、実践性を
身に付けられる場に。

「イバダイバース」第6号では、高度専門人材を育む高等教育機関としての茨城大学の役割、責務について特集します。世界中でテクノロジーが飛躍的な発展を遂げ、産業の形を大きく変えつつある今、どのような人材を育成し、地域へと送り出すことが大学の使命であるのか——4月に学長に就任した佐川泰弘が現状を分析しつつ、今後茨城大学が目指すべき姿についてお話しします。4ページからは、茨城大学を卒業後、地域社会でそれぞれの専門分野を力強く牽引し、新たな課題解決に挑む4名の卒業生・修了生が登場。各人が従事する職場において茨城大学で培った学びがどのように活かされているか、現在と学生時代とを比較しながら語ってもらいました。

佐川 泰弘

さがわ・やすひろ

国立大学法人茨城大学
第17代学長

1964年徳島県生まれ。1997年フランス国立ポルドー政治学院DEA取得コース修了。1998年、明治大学大学院政治経済学研究科政治学専攻博士後期課程単位取得退学。1998年、茨城大学人文学部に講師として着任。2006年に教授、2014年に人文学部長・人文科学研究科長となり、在任中に人文社会科学部への改組を担当。以降、理事・副学長などを経て、2026年4月より学長。専門は政治学、行政学。

創立以来80年近く掲げ続ける理念
「地域にとって有為な人材を育成する」

茨城大学は地方国立大学として、創立以来80年近くにわたり、いかなる時代にあっても「地域にとって有為な人材を育成する」というミッションを揺るぎなく掲げてきました。この点については、疑いの余地はありません。ただしそのミッションがどこに体现されてきたのかを振り返ると、かつては主として就職先という「出口」によって示されていたものが、この20年ほどで大きく変化してきたと認識しています。すなわち地域社会のニーズを強く意識しながら、教育課程やカリキュラムそのものも構築していくことに、主眼が移ってきているのです。

私自身、人文学部から人文社会科学部への改組を学部長として担った際には、「地域経営人材」の育成というキーワードを掲げました。ここで目指したのは、単に地方公務員として就職するだけではなく、地域社会そのものをマネジメントし、牽引していく人材へと成長できる人になってほしいということです。実際、本学の卒業生は自治体において部長級として活躍している例も多く、さらに教育学部においても茨城県内の学校の管理職や教育行政に関わる人材の中で、本学出身者が占める割合は非常に高い。このような実績は、地域社会における本学の役割と期待の大きさを示しているものだとは私は受け止めています。

地域が望む、理工系および農業分野
における高度専門人材の育成

一方で理工系に目を向けると、これまで全国規模の企業で活躍する人材を多く輩出してきたという実績がある反面、茨城県内で活躍する人材の育成という点では、相対的に十分とは言えなかった面もあるかもしれません。地域とどのように関わりながら、どのような人材を育ていくのかを、改めて真剣に問い直す時期に来ていると考えています。

産業界の方々、あるいは本学と関係の深い企業のトップの方々との対話を重ねる中で、とりわけ修士レベルの高度専門人材への期待が極めて高いことを実感しています。大企業での研究開発に従事する道もちろん重要ですが、それ

だけでなく、各地の生産現場において刻々と変化する状況に対応しながら、どのようにものづくりを進めるかを考え、ラインの責任や設計を担うことのできるような人材へのニーズが高まっているのです。

農業分野も同様の構造にあります。生産現場の高齢化が進む中で、農業県である茨城においては、省力化や自動化の導入なしには農業経営の持続は困難です。その中で、付加価値の高い農産物をいかに生み出すか、さらに気候変動という不確実性の中で、日本の食料需要に応える生産をいかに持続させていくかを、現場で考え、実践し、周囲を牽引していく人材が強く求められています。

今、求められる俯瞰性や実践性
多様な人との交わり、関係性が育む

本特集で紹介されている卒業生たちは、それぞれの専門性を具体的な職業の場で存分に発揮し、第一線で活躍しています。しかし同時に、人生が常に予測通りに進むわけではないことを踏まえれば、大学で身に付けるべき能力は、より汎用性、幅広さをもった俯瞰的なものでなければなりません。すなわち、どのような職種や業界、ポジションにあっても、歴史や社会環境の中で企業や地域の位置づけを俯瞰的に捉え、最適なアクションを構想し、判断し、実行できることです。だからこそ本学のディプロマ・ポリシー(DP)では、第一に「世界の俯瞰的理解(DP①)」を掲げているのです。この俯瞰性は、国際的な視野はもちろん、「課題解決能力・コミュニケーション力(DP③)」とも不可分です。

しかしながら、こうした俯瞰性や実践性は特定の授業や限られた科目だけで身に付くものではありません。むしろ鍵となるのは、ありきたりな表現かもしれませんが、多様な人との交わり、関係性です。

人は個として存在しているだけでは、自分自身を十分に認識することはできません。他者との対話の中でこそ、自らの立ち位置を相対的に理解することができる。そしてその立ち位置は固定的なものではなく、多様な社会との関係の中で常に変化していくものです。私は、学生たちがその変化を前向きに受け止められるようになってほしいと強く願っています。

地域のステークホルダーとの対話を
一層深めていくことが不可欠

そのためにも、狭い意味での専門分野の学びにとどまるのではなく、他分野の学生や社会人との関わりの中で学べる機会を、これまで以上に積極的に創出していきたいと考えています。世界各国でナショナリズムが強まる傾向が見られる中、多様なバックグラウンドをもつ留学生との交流は、普遍的な価値とは何か、あるいは世界のエリートが何を考えているのか、それが本当に望ましいのかといった問いを深める上でも、極めて重要です。

さらに地方国立大学の強みとして、学外との近接性が挙げられます。地域未来共創学環のコーオプ教育に見られるように、企業や自治体との連携を通じて実践の機会を広げていくことは今後さらに強化していかなければなりません。この4月にスチューデントサクセスセンター(SSC)内に設置したアカデミックアドバイジング室も、そうした学びへと向かう学生たちを支える基盤として機能させていきます。

そして今後の社会を見据えれば、AIの進展などにより、求められる能力は一層高度化していきます。各専門分野で学ぶべき内容も増大しており、学部4年間だけでは十分とは言えません。少なくとも6年間、すなわち修士課程まで含めた学びが、高等教育の新たなスタンダードになっていくと考えています。そのため、大学院教育においても、俯瞰性と実践性を兼ね備えた新しい教育課程への転換が不可欠です。

そのうえで、修士号を有する高度専門人材が地域で活躍するビジョンを実現するためには、産業界との対話を一層深めることが欠かせません。現状ではなお、地域において人材のミスマッチが存在しています。企業側からは「どのような場面で力を発揮してほしいのか」という具体的なニーズを引き出し、大学側からは「どのような教育を通じて、どのような人材を育成しようとしているのか」を明確に伝えていく。この双方向の対話こそが重要です。文部科学省が提唱するように、地域のステークホルダーが高等教育について議論するプラットフォームの整備も含め、さまざまな形で対話を深化させていくことが、地域における高度専門人材の育成と活躍を実現するための確かな道筋であると、私は考えています。

高度専門人材教育に関するQ&A

Q1 高度専門人材とは？

A. 高い専門知識や研究力を活かし、企業や自治体、教育機関、研究機関などで課題解決や新たな価値創造を担う人材です。茨城大学では、学部教育に加え、大学院での研究活動や実践的な学びを通じて専門性を高めています。

Q2 茨城大学の大学院には
どのような研究科がありますか？

A. 人文社会科学研究科、教育学研究科(教職大学院)、理工学研究科、農学研究科の4つの研究科があります。修士課程や専門職学位課程、博士課程を設置しています。

Q3 博士の学位を取得できますか？

A. 理工学研究科は博士後期課程(3年)を設置しており、博士の学位を取得できます。農学研究科は修士課程のみですが、東京農工大学・茨城大学・宇都宮大学が共同で運営している博士課程である連合農学研究科に接続しています。

【特集】高度専門人材を育み、社会へと送り出す使命。

地域で輝く卒業生を職場に訪ねて

茨大卒業後、それぞれの分野で存在感を発揮する専門人材をご紹介します。

歴史と文化財

在学中に体験した「足で学ぶ歴史」が現在の歴史研究の基盤に。

石巻市博物館の学芸員・泉田邦彦さんが案内する展示室内には、表面に文字が刻まれたさまざまな大きさの板状の石が並べられていた。これらは「**板碑**」と呼ばれる、13世紀から17世紀頃にかけてつくられた石の塔婆（供養塔）。宮城県石巻市は全国的に見ても板碑が多く建てられた地域だという。

東日本大震災で体験した歴史資料のレスキューがライフワークに

石巻は中世の古文書があまり残っておらず、県内最多2,100基を越す板碑は貴重な史料です。自治体史編纂に伴い、30年ほど前に多くの拓本がとられたのですが、東日本大震災の津波やがれき撤去の過程で、板碑も含めて失われてしまったものも少なくありません。これらを調査、保存していくことは、ここでの使命です。

私の実家は福島県双葉町です。江戸時代は村の小さな石高の武士の家でした。「武士は城下町に集まっていた」という教科書に書かれた歴史がすべてではないんだという気付きから、歴史に興味を持ったんだと思います。

茨大に入ってから教員になるつもりでいたので、大学院で歴史の研究を行うなんて思ってもいませんでした。転機は東日本大震災。3年生の終わりでした。原発のある大熊町を訪れていた私は、避難用のバスに乗り、自分がどこにいるのかも判然としないまま西へと移動。行く先々で地元の方たちが支援してくださったことが忘れられず、恩返しをしたいという思いが今でもあります。

その後水戸に戻り、地震や津波で被害を受けた歴史資料をレスキューする「茨城史料ネット」の活動に参加。高橋修先生が母校の神戸大学で阪神大震災の史料レスキュー活動を間近で見ていたこともあり、立ち上がりは早かったですね。被災地を回り、半壊した蔵から資料を持ち出し、目録をとり、写真を撮り、調査の上再び戻す——その一連の作業を通じて資料を私たちが歴史を考える素材として利用できるようになるまでの過程を体感できまし

いずみた・くにひこ

福島県出身。2014年茨城大学大学院人文科学研究科修士課程修了。2021年東北大学大学院文学研究科博士後期課程修了。博士（文学）。博士課程在籍中に日本学術振興会特別研究員（DC2）に採用され、2018年に石巻市に入庁し、文化財行政や複合文化施設開設業務を担当。2021年の石巻市博物館開館に伴い、同館の学芸員となる。現在、茨城大学人文社会科学部でも非常勤講師を務めている。



茨城大学大学院人文科学研究科
修士課程修了
石巻市博物館 学芸員
泉田 邦彦さん

災害に遭った歴史資料のレスキューは、自分でやらなければならない私的研究として今も続けています。

た。結局福島県の教員募集がストップしてしまったという事情もあり、大学院に進んで研究を続けることにしたのです。

原発事故で警戒区域となった双葉町に一時帰還した際、実家の史料も「レスキュー」しました。茨城周辺の出身者が多かったのも、みんな「自分ごと」なんですね。社会人となった現在も、双葉町・浪江町にまたがる「**両竹**」という地区の**大字誌**をまとめる活動を続けています。原発周辺の地域は事故を境に時間が断絶し、住民がほとんど関われないまま「復興」の名で景観が変えられていきます。将来の世代がこのまちに戻ったとき、掘りどころになるものがあるのだろうか。震災時の自分の不安も思い起こしながら取り組む「大字誌『両竹』」の

活動は、公的研究とは別の、自分でやらないといけない私的研究だと思っています。

高橋先生は「足で学ぶ歴史」を掲げていました。蔵に入って史料を探す、城址を歩いて縄張り図を描く、成果をシンポジウムなどで発表する。未熟な学生たちが自ら体験をすることを強く意識し、史料ネットでも「学生主体」を重視していました。学部時代の集中曝涼や熊野古道でのフィールドワークの体験が今の私の仕事の基盤になっています。

そして、多くの卒業生が各地で歴史・文化財に関わる仕事に就き、卒業後も交流を重ねる中で、地域の歴史研究を支える自律的なネットワークが確実に形づくられてきたと感じています。それは地方国立大の大きな役割ですね。

地域の文化財に直接関わる学びと研究のネットワーク

「茨城史料ネット」（事務局：茨城大学人文社会科学部内）は、自然災害などで被災した歴史資料をレスキューする取組みで、東日本大震災に端を発し、その後も救出資料から判明した地域の治水対策の経緯などの研究成果を発信してきました。

また茨城県内では、地域の文化財の虫干し（曝涼）を一斉に実施してお披露目の機会とする「集中曝涼」も広がっています。その端緒となった常陸太田市では、毎年のべ約150人もの学生たちが解説ガイドなどのボランティアを務め、来訪者や地元の住民からの信頼も篤くなっています。

このように地域の文化財の調査・研究に学生たち



が直接関わる機会が多くあり、それが自治体の専門職人材の育成や文化財と地域住民との結びつきにつながり、強化されていくというサイクルが生まれています。



材料にお墨付きを出す仕事。自分の「手」が結果を変えてしまうので、私は自分の手を一切信用せず、すべてを疑って始めます。

茨城大学工学部物質科学工学科卒
株式会社神戸工業試験場
茨城試験課
大戸 桜子さん

株式会社神戸工業試験場日立南試験所の2階。自動研磨機の研磨盤上に、ダイヤモンドの砥粒の**入った液体がポタポタと落ちる。研磨盤が回転をはじめ、金属の試験片は鏡のように磨かれていく。試験片を手に取った入社4年目の大戸桜子さんは、表面に薬品を垂らす。すると、木目のような模様が表れた。**

試験片を作って磨いて、組織を見て大学での研究は今の仕事と近いです

主に金属材料の試験を担当しています。お客様から預かった材料を調べて、これから製品として使って問題ないかを確認したり、長年使わ

れてきたインフラ部品の状態を調べたり、壊れた部品の原因を調査したりしています。試験といっても、決まったやり方で進めれば終わるものばかりではありません。規格で定められている材料であれば、「この薬品、この方法」とある程度決まっています。でも、開発段階の試作品だと、「いろいろ試してやってみてください」と渡されることも多い。答えがない状態からスタートするんです。

例えば金属組織試験。試験片を磨いて薬品で表面を処理すると、組織が見えるようになります。この「金属組織」は、混ぜ物や加工の方法が少し変わるだけで表情ガラッと変わります。同じ材料、同じ名前の製品でも、同じ表情はほとんどない。どんな表情が出てくるか、毎日ドキドキワクワクしてい

茨城の技術者

薬品の温度や配合を工夫して答えを出す。実験の面白さが詰まっています。

ます。入社2年目のころ、なかなか金属組織が出ない試作品を預かりました。上司たちにも相談して、夜遅くまで「ああでもない、こうでもない」って試して。薬品の温度や配合を少し変えたら、パッと答えが出て。あの瞬間はすごくうれしかった。実験の面白さが詰まっているなと思います。

材料工学の分野を選んだのは、数学と物理が得意だったことありますが、親の影響も大きいです。親が某ロボットアニメ好きで、「そのロボットを作るには、今の金属では力が足りないんだ」という話を聞いていました。強度を保ったままあの大きさにすると、重くなりすぎて、自立できず沈んでしまうと。設計図と理論があっても、材料がないと実現できない技術がある。材料一つで変わるってすごく面白いと思いました。

大学では、金属材料の強さや硬さについて研究していました。試験片を作って、磨いて、組織を見て…、という流れは、今の仕事とかなり近いです。最初は研究職や開発職も考えていたんですが、論文を読むのも書くのも苦手で。実験だけやっていたかったです。しかも知的好奇心だけはすごくあって、一つの分野だけ見て終わるのは、ちょっとつまらないなと思っていました。そんな中、大学の就職セミナーで初めて試験会社という仕事を知りました。自動車やインフラ、航空など、本当にいろいろな業界から仕事来るし、世の中に出ていない技術を見ることもできる。私にぴったりだ！と思いました。

お墨付きを出す仕事なので、責任は重いです。手を動かして初めてデータが出るということは、その「手」が少しでも狂えば結果が変わるということですね。だから、私は自分の手を一切信用していません。少しでも気になればお客様に問い合わせたり先輩に相談したりするし、資料も隅から隅まで確認してから手を動かします。機械も点検してから使う。全部疑っています。技術者全員がそうであってほしいですし、技術者がみんなそう思っているから世の中が成り立っていると思います。

おおと・さくらこ

土浦市出身。2022年3月茨城大学工学部物質科学工学科卒業。同4月株式会社神戸工業試験場入社。県内の中学校や大学で試験業界に関する授業も行う。「検案で分かることって自分の視野の少し外側ぐらい。視野を広げるきっかけになれば、という思いです」



【特集】高度専門人材を育み、社会へと送り出す使命。

地域で輝く卒業生を 職場に訪ねて

原子力

工学部で学んだ

数学や統計、電磁気学、

測定器の扱いなど基礎的な学びが

今になって生きています。

日本原子力研究開発機構（JAEA）の広報担当者から「原子力は総合科学なんです」と教わった。なるほど、化学・物理学はもちろん、放射線の影響なら生物学、最近は考古学にも量子線が使われる。そんな多様な分野の研究者たちから、実験装置の工作相談を一手に引き受けているのが、同機構の工作技術課の野澤拓也さんだ。

当時は学びが点でしかなかった
実践の機会がもっとあれば

JAEAは全国に拠点がありますが、ものづくりを専門にしている部署は東海村のここだけです。私は研究者の方々から依頼を受け、電子回路や基板の設計・実装を担当しています。最近では、放射線耐性のある発電素子の特性評価装置などを作りました。既製品では対応できない特殊な装置が多いため、外注するより内製したほうが速く、コストも抑えられるんです。

依頼内容をそのまま形にするのではなく、エンジニアの視点から「もっと良くできるのでは」と提案することを心がけています。研究者と一緒に開発した装置が特許を取得し、展示会を経てメーカーで商品化された例もあります。よい研究や社会実装につなげていくためにも、依頼の表面だけを見るのではなく、背景を理解することが欠かせません。作業中の雑談のようなフランクなやりとりを通じて、研究者の気持ちを汲み、後々でも使いやすいものをつくる。研究が行き詰まったときにそれを打開していくのは技術をもっている人だと、そう思ってもらえるように、相談に対してはプロとして何かしらのソリューションを返せるようにしたいんです。

ですから、この仕事は「狭く深く」より「広く浅く」。茨大工学部で学んだ数学や統計、電磁気学の授業、それからオシロスコープのような測定器の扱いなどの基礎的な学びが今になって生きていま

のざわ・たくや

水戸市出身。2018年茨城大学大学院理工学研究科博士前期課程修了。日本原子力研究開発機構では原子炉施設の運転管理の業務を担当した後、2022年より現在の工作技術課。プロモーションオフィス、NXR開発センター戦略ユニットも兼務。同センターでは劣化ウランを使った新型蓄電池の大型化などのプロジェクトに参加している。第3種電気主任技術者、第1種放射線取扱主任者、第1種電気工事士の資格を有する。



先輩たちが残した膨大な回路図を読み込み、職人技が詰まった原子炉の技術を未来につないでいきたいです。

茨城大学大学院理工学研究科博士前期課程修了
国立研究開発法人日本原子力研究開発機構
原子力科学研究所 工務技術部 工作技術課
野澤 拓也 さん

す。ただ、学生時代は学びが点でしかなく、どう役立つかが実感できませんでした。その意味で、学部時代にもエンジニアリングと結びついた実践の機会がもっとあったらと思いますね。

茨大では自動車用ミリ波レーダの研究をしていました。大学で通信工学を学ぼうと思ったのは、東日本大震災がきっかけです。水戸市内の高校から夜遅くによくやく帰宅して、津波や原発事故を初めて知りました。電話やネットなどの通信が遮断してしまうんだという驚きが、あの日の澄んだ星空とともに忘れられません。

震災後、工作技術課も変化しました。原子力利用の黎明期から多くの技術者が活躍し、放射線計測器などを生み出してきましたが、時代とともに職

員は減り、原発事故後は技術開発領域も原子炉だけに留まらず、より複雑化しています。そんな中で、つい最近まで電子工作の担当職員は私一人しかいなかったのです。

原子炉に使われている回路には職人技が詰まっており、今では部品が生産されていないものもあります。そんなときは先輩たちが残した膨大な回路図を読み込み、修理方法を探ります。大変ですが、ここで技術をつなぐ人がいなければ、伝統ある工作技術課が途絶えてしまうかもしれない。多様な研究者間の隙間をつなぎ、この仕事を未来につなぎたい。その思いで日々研鑽を続けています。

原子力安全・原子力規制の両面で人材育成を強化

茨城県は日本で初めて原子力発電の火が灯った地です。茨城大学では2024年に原子科学研究教育センター（RECAS）を設置し、「社会／地域課題共解決室」と「応用原子科学部門」「次世代革新炉部門」「放射線安全部門」の1室3部門体制で研究・教育を推進しています。原子力分野では、廃炉技術の開発や、放射線・放射性物質が生物や社会に与える影響に関する研究・教育を通じて、原子力安全に資する人材の育成を進めています。

また、RECASの設置と同時期に、茨城大学は原子力規制庁が実施する原子力規制人材育成事業に採択されました。本事業では、放射線や放射性物質

であるトリチウムに関する知識に加え、原子力全般に関する専門人材の育成を進めるとともに、原子力規制の考え方や制度を理解した人材の育成にも取り組んでいます。

これらの事業の一環として福島第一原子力発電所の見学を実施しています。事故で燃料デブリが落下したと考えられる箇所と同様の構造を持つ原子炉の見学など、現場で直接学ぶことで、事故の現状への理解と、今後の復旧・廃炉に向けた課題や技術についての実践的な知見を養っています。



自分の仕事を見直し、初心に帰るため、現在でも他の学校現場でいろいろな授業を見るようにしています。

茨城大学大学院
教育学研究科（教職大学院）修了
緑桜学園那珂市立
第三中学校 教諭
出羽 拓真 さん

那珂市立第三中学校。近隣の小学校とともに「緑桜学園」と呼ばれるとおり、校門をくぐるといっつもの種類の緑が目飛び込む。芝のグラウンドとそれを囲む杉林を窓から臨む2階の教室では、帰りの会が行われている。生徒たちが主体的に進行する様子を、担任の出羽拓真先生がにこやかに見守っていた。

教職大学院の1期生。授業映像の文字起こしに気づきが多くありました

の学年は、入学したときからずっと担任しています。3年目になると、帰りの会も自分たちだけで進められるようになる。私がいなくても大

丈夫（笑）。

授業を通じて、子どもたちの意見や、「自分たちでやろう」という気持ちを育てることを目標にしています。学部時代の卒業研究では、「児童中心主義」を掲げる研究者や実践者の考えを整理しながら、自分ならどう授業に活かせるかを考えていました。その過程で出会ったのが、小・中学校の教員を経て実務家教員として着任した打越正貴先生です。打越先生の講義を通して、「授業がもしろいのって大事なことなんだな」と実感したんです。子どもたちが主体的になれる授業づくりをもっと追究したい。そう思うようになり、当初は考えてもいなかった大学院進学を選ぶことになります。

それが実は、教職大学院ができた最初の年。

教育

恩師の講義を通じて学んだこと。

授業がおもしろければ、

子どもたちは主体的になる。

1期生だったんです。先生たちも手探りで、昔の著名な教師の授業映像を見て文字起こしをするような課題もありました。次の年からはそれを教材として使っていたと思います（笑）。でも文字に起こされたものを読み返すと、行間も含めて多くの気づきがあって役に立ちました。

実習先の小学校では算数を担当し、考えを吹き出して書かせる実践などに取り組みました。教師は子どもへの理解が深まり、子ども同士は学び合いが生まれる。そうして大学と学校現場を往復しながら学ぶことで、その後、自分の勤務校や実践を俯瞰して捉えられるようになったと感じています。

中学校は、小学校に比べて担任が生徒たちと向き合う時間が限られていますよね。ですから、小さな問題でも言葉に還元して共有するし、授業でノートをどんなふうに書いてほしいかも伝えて、よかったものは価値づけてフィードバックしていく。口頭だけでなく学級通信を通じて保護者にも伝える。それから、私自身の姿勢や行動も生徒たちはよく見えています。だから私もちゃんと行動するし、できていなかったら「ごめん」と伝える。そういう小さなステップを一步步積み重ねていくうちに、自分たちのクラスを良くしたいという思いが子どもたちの中に育ち、主体的に動けるようになってきました。

学校や地域によって実態はさまざまですが、どこであっても、その子たちに向き合い、授業を工夫することはできるし、それこそが地域に根ざして教育を支える教師の力量だと考えています。その意味で、現在でも他の学校現場におじゃましていろいろな授業を見るようにしているんです。忙しさはありますが、自分の仕事を見直すヒントもたくさん得られますし、初心に帰れる気がします。大学でも、学生たちができるだけたくさん学校へ足を運び、現場の実際の姿に触れる機会をつくってほしいですね。一方、教育原理や歴史の学びもやっぱり大事。教科の専門的な知識と多様な子どもたちの学びの間の「はしご」をどう作っていきけるか、大学生にも日々意識してほしいです。

でわ・たくま

千葉県出身。2016年茨城大学教育学部卒業。2018年茨城大学大学院教育学研究科（教職大学院）を修了。現在、公立学校の教諭として9年目。担当教科は英語。今年度、校内では道徳主任を自ら志願して担当。「道徳の授業が授業力向上の要になる。授業外の実践にどうつなげられるかを含め向き合っていきたいです」



IBADAI Chocolate Project

茨大チョコレート プロジェクト



アジア最大の 카카오豆生産地・インドネシア。同国 카카오の付加価値向上や地域産業の持続を目的としたチョコレートづくりが実を結び始めています。



チョコレートを温めたり冷やしたりして内部の結晶を整える「テンパリング」。より滑らかな口溶けに。

茨城大学農学部とインドネシアのガジャ・マダ大学 (UGM) との連携の中から生まれた「茨大チョコレートプロジェクト」。インドネシア産カカオを使ったチョコレートづくりを通じて、カカオの付加価値向上や地域産業の持続などの課題に向き合う取り組みです。学生たちは現地のカカオ農園や加工施設で学びながら試作を重ね、2025年にはオリジナルチョコレート「POD」が完成。大学間協働の中で育まれた構想が、一つの形となりました。

25年以上にわたって交流 茨大とインドネシアのガジャ・マダ大学

茨大チョコレートプロジェクトは、応用生物学野の佐藤達雄教授と、東京農工大学大学院連合農学研究科博士課程 (茨城大学配置) の岩田京さんを中心に、2023年に立ち上がりました。インドネシア農業やチョコレートづくりに関心を持つ学生たちも参加しています。

背景にあるのは、茨城大学とインドネシアのガジャ・マダ大学 (UGM) との25年以上にわたる交流です。両大学は2000年に農学部間で、2010年には大学間で交流協定を締結し、教育・研究の両面で連携を続けてきました。

2017年、佐藤教授がUGMを訪れた際、UGMが学生や地域農家向けに、カカオ豆の生産や加工について学ぶ教育施設「UGM Cocoa Teaching and Learning Industry」の整備を進めていることを知りました。これをきっかけに、インドネシア産カカオを使ったチョコレートプロジェクトの構想が生まれたといいます。2020年には茨城大学の学生がその教育施設を初めて見学し、プロジェクトの構想がさらに具体化していきました。

現在も、岩田さんによるインドネシアのカカオ農家の調査にUGMの教員や学生が同行し、農家との橋渡し役を担っているほか、カカオ豆の輸入などにも協力しているといいます。また、UGMでのカカオに関するワークショップには、茨城大学の学生も多く参加しています。

現地のカカオ農家が持続的に 生産を続けられる仕組みを模索

世界的にチョコレート需要が高まる中、カカオ市場では価格の高騰が続いています。世界第3位の生産量を持つインドネシアにも注目が集まっていますが、インドネシア産カカオには品質や流通をめぐる課題もあります。

品質を左右する重要な工程が、カカオ豆の発酵です。インドネシアでは、バナナの皮を使った伝統的な方法で発酵を行う農家も少なくありませんが、この方法では酸味が強くなりすぎる場合があるといいます。また、発酵してもしなくても価格差が大きいため、未発酵のまま乾燥させて販売されるケースもあります。後ほど再び湿らせて発酵させますが、品質は異なってしまいます。

2023年11月に現地を訪問した岩田さんは、「Beanto Barの事業を進めたり、カフェを作ったりしてビジネスに積極的な農家もある一方で、多くのカカオ農家は、カカオが安くしか売れないのでやる気が上がっていない印象を受けました。価格が高騰しても、それが農家の収入にはつながっていないのです。このままだと生産をやめしてしまう農家も増えてくると思います」と話します。UGMの農家出身の学生に話を聞くと、日本と同様に高齢化が進んでいる実態も見えてきました。

こうした状況を踏まえ、岩田さんは「インドネシア産カカオの認知度をもっと上げられないか」と模索するようになったといいます。インドネシア産カカオの価値を高めることで、現地農家が持続的に生産を続けられる環境にできないかと考えたのです。

インドネシア産カカオの魅力を伝える チョコレートづくりに着手

プロジェクトでは、インドネシア産カカオの価値をより多くの人に知ってもらう方法の一つとして、チョコレートづくりに取り組んでいます。単にカカオ豆を原料として扱うのではなく、加工から製品化までを一貫して行うことで、インドネシア産カカオの特徴や魅力を伝えようとしています。



現地で取材する佐藤達雄教授 (上) と収穫されたカカオの実 (カカオ・ポッド) (下)

海外に興味があり、UGMのワークショップに参加しました。チョコレートはつくる工程が複雑で、豆の種類で味が変わるなど、奥が深いと感じています。

岩田さんが収集したインドネシア産のカカオ豆の香りを産地ごとに比較する研究をしようと考えています。ロースト前後の揮発性成分をガスクロマトグラフィーで調べる予定です。



農学部
食生命科学科3年
甲田文哉さん

農学部
地域総合農学科4年
高野愛菜さん

東京農工大学大学院連合農学研究科
博士課程 (茨城大学配置)
岩田京さん

製品化のための試作用チョコレートは茨城大学農学部附属国際フィールド農学センターに整備された設備で作ります。製造は、カカオ豆の焙炒から始まり、磨砕やコンチング、テンパリングなどの工程を経て行われます。完成までには2日間を要し、長時間かけて滑らかに仕上げていきます。

現在は、インドネシアから、10種類ほどのカカオ豆を輸入。単一産地のカカオを使う「シングルオリジン」で、カカオバターや砂糖の分量など、豆以外の材料や配合を変えず、産地ごとの風味の違いを感じられるようにしています。

水戸市のチョコレート専門店「DALMAISON」も協力しています。テンパリングなどの技術面で助言を行いながら、地域の専門店としてプロジェクトに関わっています。学生たちとともにインドネシアを訪問し、UGMで開かれたチョコレートワークショップにも参加しました。

完成したチョコは「POD」と命名 フルーティーな香りと酸味が特徴

そして2025年秋、オリジナルチョコレートが完成しました。インドネシア産カカオ特有のフルーティーな香りと爽やかな酸味が特徴です。

名前は「POD」。「Pathway Of Dreams (夢へと続く道)」の頭文字から名付けられたもので、カカオの実を意味する「カカオポッド (cacao pod)」にも由来しています。

パッケージやチョコレートの型のデザインは岩田さんが担当しました。パッケージはカカオポッドを模した形で、ふたの裏には、スマトラトラやラフレシアなどをモチーフにしたカラフルなイラストが描かれています。インドネシアの豊かな自然環境をイメージしたものだといいます。現地で訪れたDalijoさんの農園について、「鶏やヤギが飼われているほか、ココナツやドリアン、キャッサバなどさまざまな作物と一緒に育てられているんです。最近ではこのような農業の形態を『アグロフォレストリー』といいます。そののどかな風景が“パラダイス”のように感じました」と話します。実は、岩田さんの本業はデザイナー。「普段の仕事ではクライアントの意向がありますが、今回は自分の想いをデザインで100%表現させてもらえたことが嬉しかった」と振り返ります。

完成品は、2025年10月に阿見キャンパスの学園祭「秋耕祭」で試験的に販売して好評を博し、11月には水戸キャンパスの学園祭「茨苑祭」でも販売しました。製造はDALMAISONが手がけました。

インドネシアの農家にも手渡しました。自分が出荷したカカオがどのような商品になるのか知らない人も多く、「自分たちのカカオが日本でチョコレートになったことをすごく喜んでくれました」と言います。

現在は、学園祭以外での販売予定はありません。岩田さんは「いつでも買える形で販売し、恒常的にインドネシアの農家にお金が入る仕組みが作れるのが理想」と今後の展望を語りました。



インドネシアから輸入したカカオ豆からチョコレートを作る。型のエンボスは、カカオの果肉「カカオバルブ」をイメージ。

インドネシア産カカオ豆の品質を高める研究も。キーとなる発酵条件とは？ 大学院農学研究科 日向寺美有さんに聞きました。

インドネシア産のカカオ豆はガーナ産などに比べて風味が弱く、酸味・渋味が強いという特徴があります。私が所属する中村彰宏研究室では、同国産のカカオ豆から作製したチョコレートの品質向上の研究に、不二製油株式会社と共同で取り組んでいます。

私たちが研究に使用したのは、インドネシアのガジャ・マダ大学から提供いただいた、グヌン・キドゥル県産のカカオ豆です。現地では自然発酵が一般的ですが、今回

は先行研究を参考に、2種類の微生物を最初に接種 (スターター接種) して発酵試験を行いました。発酵後にチョコレートに加工した上で官能評価を行います。

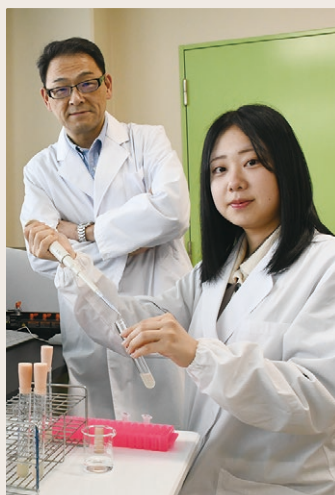
まず、スターター接種の有無で品質を比較したところ、接種した方で、カカオ感が高く、また酸味が低くなりました。

次に空気接触を避けた嫌気的な環境から酸素が供給される好気的な段階へと転換するタイミングの違いによって、品質がどう変化するかを調べました。

その結果、発酵1日目に好気転換したものは、発酵2日目に好気転換したものに比べて、カカオ感と嗜好性が向上する傾向が認められました。

これから、微生物の増殖や生産活動を制御することにより、高品質なカカオ豆となる可能性があると考えます。

この研究が、生産量の多いインドネシア産カカオがもっと流通し、世界中でおいしいチョコレートが食べられる未来につながればと願っています。



ACADEMIA IBADAI

知のプラットフォームとしての
茨大のよりディープな側面を、
さまざまな視点からご紹介します。

COLUMN

研究に恋して

基礎自然科学野 准教授 小林 優介

「葉緑体 DNA」は細胞膜を持たないのに
分子が集まり、周囲と異なる領域をつくる。
この性質を利用し「完全に液体の生き物」
を試験管内に誕生させることに挑戦中。

4、5歳の頃の記憶だ。屋外に置かれた、水の入ったバケツ。中に葉っぱが落ち、しばらくすると水は緑色になっていた。「葉っぱの緑がバラバラになって、違う生き物になったんだ」。小林優介准教授は当時、そう考えたという。

幼少の記憶を呼び起こすきっかけは、研究費を申請するための執筆作業だった。眠れない夜が続く中、思考は進んでいく。「生き物って、バラバラになつたらなぞ戻らないだろう」。

生き物の最小単位は、脂質の膜によって外界と内側を隔てた、「細胞」という小さな部屋である。この境界の内側に、生きるために必要な部品が詰め込まれている。小林准教授の研究対象は、植物の細胞の中にある「葉緑体」という光合成を担う器官だ。葉緑体は、もともと独立した光合成生物が、別の細胞の中に取り込まれ、共生することで誕生したと考えられている。

葉緑体の中には、その祖先から受け継がれた葉緑体DNAが存在する。その葉緑体DNAは、葉緑体の中で

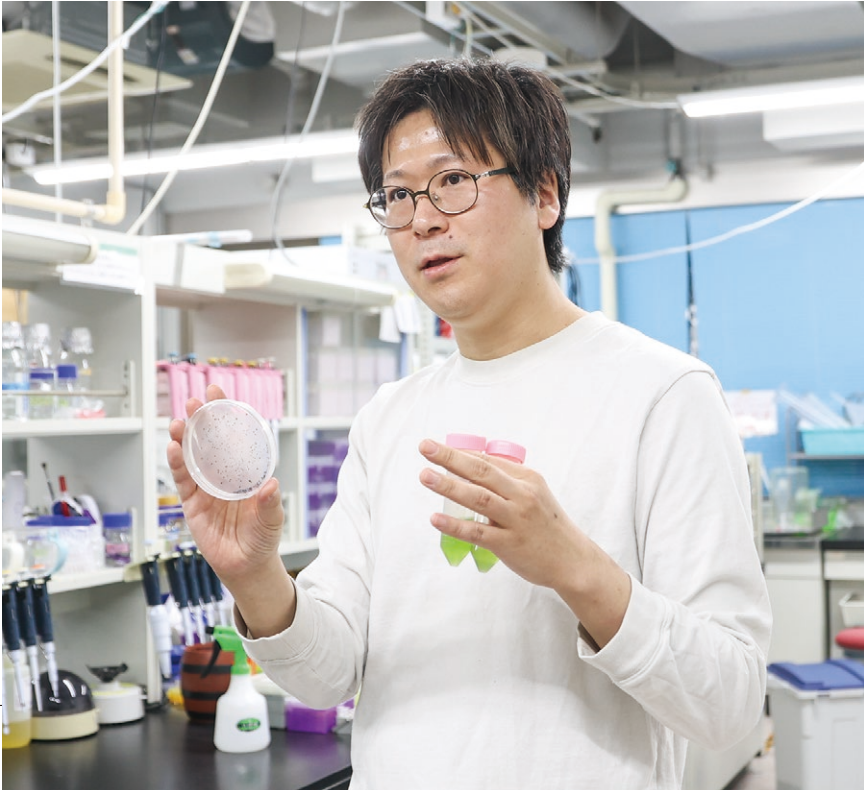
き出しに存在しているわけではない。タンパク質とともに集まり、「核様体」と呼ばれる構造をつくっている。膜で囲まれているにもかかわらず、核様体はひとまとまりの構造として維持され、細胞内でダイナミックに動いている。

こうした仕組みを手がかりに、「葉緑体遺伝機構に学ぶ非膜型自己複製系の創造」に挑むことにした。葉緑体DNAが集まり、増えていく仕組みを試験管内で再現できるのではないかと考えたのだ。この研究課題は、2025年度の創発的研究支援事業に採択された。単細胞の藻「クラミドモナス」を用いて、葉緑体DNAがどのように集まり、分配され、受け継がれるのかという問いを追い続けてきた。

学生時代には、葉緑体DNAがうまく分配されなくなるクラミドモナスを解析。DNAは傷つくともう片方の情報を使って修復されるが、その過程でDNA同士が絡まり合うことがある。その絡まりを切りほき、正常な分配を可能にする仕組みを解明した。



左) 学生の実験準備を見守る小林准教授。右) 研究室では「くらみ」と呼ばれる単細胞の藻「クラミドモナス」。下は、他生物が持つ発光するDNAを注入して、遺伝していく様子を調べたもの。



「母性遺伝」の仕組みにも迫ってきた。多くの生物で、ミトコンドリアや葉緑体は、母親からのみ遺伝することが知られている。クラミドモナスは、卵子と精子がほぼ同じ大きさで融合するにもかかわらず、父親側の葉緑体DNAだけが分解される。小林准教授らは、DNA分解に関わるタンパク質が母親側から父親側に移動して分解していく様子などを発見してきた。

研究を進める中で、小林准教授が目にしたのが、膜を使わずに分子が集まる仕組みだ。細胞内は、一見すると均一でさらさらした空間に見えるが、実際には「満員電車ぐらい混み合った」環境の中を、さまざまな分子が行き交っている。そのような空間の中で、同じ機能を持つ分子同士が集まり、細胞内に特定の領域をつくることもある。そしてその集合には、かつて「無駄そうな配列」と考えられていた、決まった形を持たないタンパク質領域が関わっていることが分かってきた。「膜がなくても、分子は集まり、周囲とは異なる領域をつくることができます。だからこそ、細胞内では合成と分解という正反對の反応が混線せずに進むのだと思います。実は、生き物の中では、膜で囲まれているにもかかわらず、いろいろなものがまとまりをつづっているんです」。

こうした現象の延長線上に、小林准教授は、葉緑体の核様体のダイナミズムをもとに「完全に液体の生き物」のようなものを作れないか、という発想

を抱いている。膜に包まれた細胞そのものではなく、分子が集まり、増え、受け継がれていくことで生命らしさを示すシステム。その実現に向けた第一歩として、葉緑体DNAが集まり、複製され、次の世代へ受け継がれていく仕組みを試験管内で再構成しようとしている。「植物や藻類は、葉緑体DNAの遺伝を制御しています。少なくとも生き物がそれをやっている以上、私たちも試験管内で葉緑体DNAの遺伝を制御できるはずです。それができたら、かっこいいじゃないですか」。

幼いころ、葉っぱが崩れ、別の生き物になったように感じたこと。小学生時代、花瓶に挿した植物の中に、根を出すものと出さないものの違いを考えたこと。当時は誰も答えられず、もやもやした感覚が残った。しかし今、子どもの頃に抱いた違和感と研究の中で見えてきた現象が、少しずつつながり始めている。「ずっとなんで？ って思っていたこと。いろいろなことがつながって、面白いなと思いますね」。

PROFILE

小林 優介 (こばやし・ゆうすけ)

大分県生まれ。京都大学大学院理学研究科博士後期課程修了、博士(理学)。国立遺伝学研究所研究員などを経て、2019年茨城大学に着任。2025年より現職。2017年日本植物形態学会平瀬賞、2018年日本植物学会若手奨励賞、2019年井上科学振興財団井上研究奨励賞、同年日本植物形態学会奨励賞、2020年茨城大学学長学術表彰奨励賞。

COLUMN

イバダイと地域力

——知でつながるコミュニティ

水戸市街地×茨城大学＝「まちのイバダイ」

水戸のまち全体が新入生を温かく
迎えるような雰囲気のカタチに——。
茨大が水戸のまちに飛び出し、溶け込む
インタラクティブな10日間の効果。

まちに響く茨大生の声

水戸駅の北側から大工町にかけてまっすぐに延びるメインストリートの街頭スピーカーから若い声が聞こえてくる。

「地元を離れて水戸で暮らしています。大学の講義が終わった後まちの料亭でアルバイトをします。お料理運びふと顔を上げると、お客様の笑顔。そんな何気ない景色が、このまちで生きている実感を教えてくれます……」

茨城大学の学生たちが水戸のまちとの関わりを語る音声を毎日放送。これは茨城大学水戸市街地アウトリーチ週間「まちのイバダイ」の企画のひとつだ。

きっかけは卒業式・入学式

2023年に水戸市民会館が市街地の中に開館。約2000人収容の大ホールができたことを契機に、茨城大学の入学式と卒業式の会場を、それまでの茨城県武道館から変更した。

「卒業式も入学式も、県外出身者を含む2000人の学生たちとその保護者が集まる。商店街の人たちにとってもそれはインパクトのある光景だと思うですね」。当時の学長である太田寛行名誉教授はそう語る。この「インパクト」を、地域における茨城大学の存在感につなげたい。

また、新入生を水戸のまち全体が歓迎してくれているような雰囲気醸成したい——そんな思いから、卒業式と入学式との間の約10日間、水戸の市街地の施設や店舗を利用して、茨城

大学の教職員・学生が企画した展示やワークショップを展開するアウトリーチキャンペーンを構想。昨年(2025年)3月に「まちのイバダイ」として実を結んだ。

まちあるきで再発見する魅力

大学教員や学生たちが案内するまちあるきは、いかにも「まちのイバダイ」らしい企画だ。初年度は工学部都市システム工学科で建築デザインを指導する稲用隆一講師とその研究室の学生たちが、ユニークな建築物を見て回るワークショップを企画してくれた。地元の人にとっては見慣れた弘道館も、建築が専門の学生たちと歩くと、廊下や空間の細やかな工夫に気がつく。水戸の暮らしの歴史の厚みにじっくりと触れることができた。



まちあるき風景。



水戸市民会館での入学式後、水戸芸術館でパイプオルガンの特別演奏を聴く新入生たち。



鮮やかな色彩がひと際目を引く「まちのイバダイ」のポスター。2025年版(左)、2026年版(右)。

今年は歴史地理学が専門の小野寺淳名誉教授が案内する「江戸時代の町人街を巡ろう」。こちらは申込受付後すぐ定員いっぱい。人形店の祐月、水府提灯の青野商店、佛具店のオケキ、薬局の岩間東華堂といった老舗を巡りながら、その道中で水戸の武士と町人の住まい方の変遷などの解説もあり、充実したウォーキングとなった。

交流から生まれる新たな連携

「まちのイバダイ」をきっかけに新たな深いつながりが生まれた例もある。

1年目、茨城大学学生フォーミュラ部による展示企画を、南町の水戸読売会館で実施した。当初は会場提供の協力だけだったのが、同ビルのオーナーであるデザイナーの方が、自分たちで設計・製作した車でレースに出場している同部の活動の話を聞いて感銘を受け、継続的なサポートを申し出てくださったのだ。そしてジュエリー店などと協力して、なんとフォーミュラ部のためにオリジナルアクセサリを制作。今年の「まちのイバダイ」で贈呈式まで行った。

また、五軒町の水戸芸術館では「高校生ウィーク」という企画と連携して初年度に哲学カフェを開催。翌年、水戸芸術館の担当者から、「隣の水戸市民会館で入学式が行われるのにあわせて、新入生を芸術館に招待したい」というオファーを受けた。今年の入学式では、新入生たちに企画展の招待券がプレゼントされるとともに、パイプオルガンの特別演奏会も実施された。スーツを身にまとった新入生たちがパイプオルガンの生の響きに聴き入り、贅沢な水



水戸芸術館「高校生ウィーク」と連携した哲学カフェ。

戸の生活の皮切りとなった。

総合気候変動科学の発信も

茨城大学の強みの分野を地域の方たちに知っていただく上でも大切な場となっている。今年は気候変動の「適応策」をテーマとした2つのイベントも展開した。ひとつは、水戸のまちなか大通り等魅力向上検討協議会との共催によるシンポジウム。地球・地域環境共創機構(GLEC)の小寺昭彦講師の話題提供を通じて、暑熱化でも歩ける水戸のまちのあり方を、集まった市民や学生たちが一緒に考えた。

それから、茨城県JA会館では「サステナ食堂 気候変動対策をキッチンから」という調理ワークショップを実施。担当は教育学部家庭選修の石島恵美子教授。日常の食を通じて実践できる気候変動適応策は、実は結構ある。高温に強い「にじのきらめき」というお米を炊いたり、温暖化の影響で栽培時期が早まるトマトなどの夏野菜を、体を冷やさずに食べる方法を全員で試したりするなど、「サステナビリティ」を味覚で学ぶ時間となった。



サステナ食堂の様子。

まちに溶け込んだ大学の姿

これらの活動の準備や広報には、学生たちもボランティアスタッフとして参加している。グラフィックが印象的なポスターやチラシを学生たちが店舗などに持参すると、お店の方があたたかく迎えてくださった。「うちの子ども茨大なんですよ」といった声を繰り返し聞くうちに、学生たちも職員も、水戸のまちに溶け込んだ茨城大学の姿を再発見する。この経験にこそ「まちのイバダイ」の本当の価値があるのかもしれない。

全力！茨大サーフルライフ！

サークル・部活動で輝く茨大生たちにインタビュー！

このコーナーでは「大学ならではの」サークル活動や部活動に熱中する茨大生に注目！茨大が持つ3つのキャンパス——水戸キャンパス、日立キャンパス、阿見キャンパスそれぞれの特色を生かして活動するサークルを紹介します！



Maki Kido Honami Igarashi Rio Kimura

目指すは、ロボコン2年連続優勝！

ロボット技術研究会

in 日立キャンパス

ロボット技術研究会（通称ロボ技）は、毎年6月開催の「知能ロボットコンテスト」での優勝を目指し、競技ロボットの構想や製作に取り組んでいます。昨年は2部門での優勝を含む4賞を受賞する快挙を達成。注目が高まるロボ技の代表、尖戸優雅さん（大学院2年）に活動の魅力を聞きました！



立体駐車場
接吻丸 蒼波の舟唄



左) 昨年のロボコンに出場した2機。
中) 活動の様子 右) 基板の構造を解説する尖戸さん

普段はどのようなロボットを作っているのですか？

尖戸 ロボコンで出される、「競技台に散らばった3色のボールを時間内に指定されたゴールへ入れる」という課題に対応するロボットを作っています。私たちはこれを1年かけて構想し、4月からの2か月半で本格的に製作しています。

ロボット作りにはさまざまなトラブルが付きものだと思いますが、どう対処していますか？

尖戸 「ロボット製作は常にうまくいかない」という前提で進めています。どんなに気を付けてもミスやトラブルは避けられず、新たな課題が見つかることもあるため、余裕を持って計画を立てます。実際に問題が起こった場合は、適材適所の人材を割り当て、チーム全体で解決しています。

具体的にどのようなトラブルがあるのか、教えてください。

尖戸 ロボットに搭載する基板は非常に細かいため、配線を一隣につけてしまったり、振動で外れたりすることが珍しくありません。大会直前にロボットが動かなくなることも毎年のようにありますが、苦労が多い分、優勝の喜びは格別です。

ロボットにはユニークな名前がついていますが、どのように命名しているのですか？

尖戸 ロボットの特徴を踏まえ、みんなで名前を考えています。「Chat-GPT」というロボットは、構想段階でのアイデア出しを「ちょっとだけ」Chat-GPTに頼ったことが由来です。また「アダム・スミス」は、透明なハンドでボールを掴む様子が神の“見えざる手”のようだと名付けました。

ロボ技では活動の一環でスポーツにも取り組んでいるそうですね。きっかけは何だったのでしょうか？

尖戸 顧問の森善一先生（工学部）のご意向です。先生は介助福祉系のロボットを研究しており、「良い研究やサークル活動には健康な心身が欠かせない」との思いからスポーツを取り入れるようになりました。先生も一緒にバスケやバドミントンを楽しんでいます。

最後に、今後の意気込みを教えてください。

尖戸 もちろん次回も優勝を目指します。ただ去年のロボットはこれまでの集大成だったため、今年は新しいアイデアを考えることに苦戦しています。そのため個人としては、卒業までに多くのアイデアを残し、後輩たちに発展させてもらうことが目標です。

工学部生以外の加入も大歓迎とのこと。ぜひ問い合わせしてみてください！

部員数：36名
2007年発足
問い合わせ インスタグラムまたはXにご連絡ください。@ @ibarobogi @rgkk_study

環境にやさしい農業を実践

Ami Dream Farm

in 阿見キャンパス



農学部4年
片岡紗和さん

私たちの活動目標は「環境にやさしい」農業をすることです。農業には、気候の変動や土地環境など自分たちにはコントロールできない課題がたくさんあります。そのような課題に対し、試行錯誤を重ねて栽培方法を工夫していくことにやりがいを感じています。何より野菜が育つ過程を間近で見ることで、農業の楽しさを体感できることがこのサークルの魅力です。私たちの育てた野菜は、茨城大学の学園祭や外部のイベントで発売しています。サークル内の雰囲気も良く、和気あいあいと農作業に取り組むほか、メンバー同士の親睦を深めるBBQやスキーといったイベントも開催しています。

部員数：約30名
2023年発足
問い合わせ インスタグラムまたはXにご連絡ください。@ @2023_ibaraki_farm @2023ibarakifarm

一生モノの特技が身につく！

大道芸サークル スウェット組合

in 水戸キャンパス



理学部4年
溝淵陽菜さん

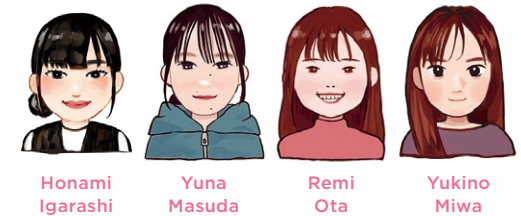
私たちのサークルの主な活動は地域イベントや茨苑祭でのパフォーマンス披露で、週2回集まり練習に励んでいます。メンバーの多くが未経験からのスタートなので、初心者も大歓迎です。私も自分のペースで練習を重ねるうちに、一生モノの特技を身に付けることができました。できることが増える楽しさや人前で披露して得られる達成感大きな自信に繋がります。新しいことに挑戦してみたい方、ぜひ私たちと一緒に活動しましょう！

部員数：25名
2000年発足
問い合わせ インスタグラムまたはXにご連絡ください。@ @sweat_association @sweatkumiai

茨大ほつとステーション

茨大生の暮らしを支える熱血茨大サポーターズをご紹介！

私たち茨大生の生活を支えてくれている学内外のさまざまな人物にインタビュー。今号では水戸と阿見の2つのキャンパス近くで茨大生と深く関わるお店をご紹介します。店舗運営で心がけていることや茨大生への想いなどを伺いました。



Honami Igarashi Yuna Masuda Remi Ota Yukino Miwa

1986年開店のグループ第1号店。BOOKACE 茨大前店

SHOP DATA 茨城県水戸市堀町 1094-7



「BOOKACE茨大前店」の店内に並ぶたくさんの本に心を躍らせつつ、書店や本の魅力について伺いました。

水戸キャンパスから徒歩5分、茨大生はもちろん地域の人々が本を通じて新たな世界との出会いを求めて足を運ぶ「BOOKACE茨大前店」。この店は、1986年にBOOKACEの第1号店として産声を上げました。開店当初は、現在ミストブが位置している場所に店舗があったそう。昭和の面影を残していた店舗外観は、10年前に行われた全面建て替えリニューアルにより現在のモダンな姿へと変貌を遂げました。

茨大前店には約数十万冊の蔵書があります。業界の仕組みにより入荷する図書のセレクトは店側の自由にならないところがあるそうですが、その中でも店舗の独自性をアピールするため、特に売り場の作り込みには力を入れています。インフルエンサーやネット書店のランキングなどの情報



上) お客様の目が留まりやすい入口付近には、旬の商品が並びます。
下左) 店長の君島さん。ソロキャンプで焚火の明かりを見ながら読書を楽しんでいるそう。
下右) 10年前のフルリニューアルで外観もモダンに変わりました。

地域に寄り添う、阿見町のボリューム満点食堂「らくだ食堂」

SHOP DATA 茨城県稲敷郡阿見町阿見 4515-18 / 11:00~15:00・17:30~21:30 日曜定休



阿見町にある「らくだ食堂」。店名の由来からメニューのこだわりまで、店主の思いを伺いました。

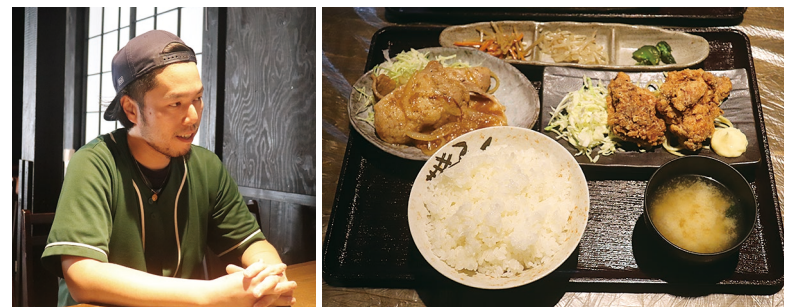
茨城大学阿見キャンパス周辺にある「らくだ食堂」。ボリューム満点のおかずにごはん。地域の方々にも愛され、大学生や働く人々のお腹も満たしてくれるお店です。「らくだ食堂」という店名は、「覚えやすい動物の名前にしたい」という思いと、「外食は自炊より“楽だ”よね」という発想から生まれたものだろう。ここは、もともと店主の中村翔大さんのお父様が居酒屋を営んでいた場所。コロナ禍でお酒を扱う業態が厳しくなり閉店することになった際、中村さんが独立することを決意し、業態を変えて食堂としてスタートしました。

らくだ食堂の魅力は、なんといってもボリューム満点の定食です。特に人気があるのは「鶏のから揚げ」と「チキン南蛮」。すべて手作りで南蛮

ダレやタルタルソースもオリジナルの自慢の品。「ぜひ一度は食べてほしい」と中村さんは胸を張ります。ほかにも日替わりのおかずを2品選べる定食も好評です。品切れになったら終了というスタイルは、食品ロスを減らしつつ、お客さま側の“選ぶ楽しさ”も大切に生みましました。

阿見町には茨城大学の他にも大学や工業団地があり、学生や働く人たちが多い地域だからこそ、料理のボリュームを大切にしているそうです。居酒屋時代の名残でランチにはドリンクバーが無料でつくのも、魅力の一つです。

「地域に、人に、長く愛される店でありたい。大学生が数年後に阿見を訪れたときに『学生の時によく食べたな』と思い出してもらえような場所になれば」と中村さんは話します。阿見キャンパスに来て、温かくておいしい定食をお腹いっぱい食べたくになったら、ぜひこの店に足を運んでみてください。



上) らくだが描かれたのれんが印象的な入口。
下左) 店主の中村さん。高校時代からお父様のお店でアルバイトをされていたそうです。
下右) 人気のから揚げと豚しょうが焼を注文。もちろんご飯は大盛りで！

先生、いいですか？

～茨大教員の素顔を調査！～

茨大教員約600人の中には意外な趣味や特技を持つ人物が…？！

大学は小中高と比べると一人ひとりの先生と関わる時間が少ないと感じている人もいるかもしれません。このコーナーでは茨大の先生たちに、自身の学生時代の話や趣味、学生への向き合い方などについて聞き、先生たちの「素顔」をお伝えしています。皆さんと先生との距離を縮めるきっかけにできればと思います！

会社員から日本語教師へ転身。 大洗で日常に寄り添う教室を展開



人文社会科学部
横溝 環 准教授

多文化共生や多文化教育をテーマに研究している横溝先生。日本語教師になったきっかけや教室への思いについて伺いました。

先生が日本語教師を目指した経緯を教えてください。

短大を卒業した後は5年ほど企業に勤めていま

した。その頃会社で開かれていた英語教室で、日本語教師という仕事を知ったことが大きな転機でした。その後、中国・河南省で日本語教師として働いた経験もあります。生徒から現地の生活術として「修理を頼む時は『直してください』と言うより『壊れた』と伝える方が修理してもらえるよ」と教わったりしました。実践してみたら、本当にその通りでした。なぜなのでしょうね(笑)。



先生が今関われている日本語教室について教えてください。

大学で教える傍らで、大洗町で日本語教室を始めて12年ほどになります。現在はオンラインと対面を併用していて、ロコミで他県や海外から参加してくれる人もいます。ルールはあまり決めず、無理なく続けられる教室を目指しています。一方で、協力してくれる学生には、参加者が仕事や勉強で忙しい中、時間をつくって来てくれて



Maki Kido

Tomohiro Onuki

いることを意識してほしいと伝えています。私が予定の連絡を忘れると参加者の方から連絡をもらうこともあるんです。彼らの日常の中にあって当たり前の場所でありたいと思っています。

最後に学生に伝えたいことをお願いします。

タイパ、コスバの時代ですが、簡単に得られるものではなく非効率的でも時間を掛けた方が記憶に残る貴重な経験になると思います。特に足を使って地道に関わり続けることはとても大事。研究をしても、とりあえず動いてみると拓けていく感じがします。行ってみる、そこにいる人と話してみる、つながることを実践して欲しいですね。



日本語教室の様子。和気あいあいとした雰囲気！

数学は、「分かることが面白い」。



理学部
相羽 明 准教授

大学で数学を研究している相羽先生。ゼミの学生と普段から親しく交流しており、昨年の茨苑祭では一緒に出店も行っていました。今回は、数学との向き合い方や学生との関係についてお話を伺いました。

数学に興味を持ったきっかけはなんですか？

高校生の頃、数学のゆっくり考えて分かることが面白いと思った、そこからかな。それが研究を続けられている理由でもある。今でも毎日市販の数学本の問題に取り組んでいますよ。研究と言えるかは微妙だけど。特に、自分の研究対象の整数論を解いています。整数論の面白さは規則性を見つけることと大学数学で面白い整数に関する理論がたくさんあることだね。

大学で学ぶ数学は社会でどのように役立っているのでしょうか？

一番使われているのはコンピューターの仕組みのところだね。動作のON、OFFとか、最終的には0と1の行列で行われるから必ず数学を使うんだよね。かくいう私はパソコン操作には詳しくないのだけれど。

どういった人が数学科に向いていると思いますか？

数学が好きな人、面白いと思う人だね。数学ができるできないに関係なく面白いって思えたら向いていると思う。大学では証明問題が増えてくるから、そういう内容が好きな人も向いて

いるかな。結局は、数学を面白いと思えることが一番大事だよ。

先生は普段から親しく学生と接している印象があります。

それは、ただただ楽しいから。週に1回、ゼミの生徒達と私の家で飲み会をしています。だからだんだん親密になっていく。いろいろな飲み会の写真が残っていますよ。卒業してもゼミに来てくれる人もいるしね。去年の茨苑祭の出店は、コロナ禍で中断していたのを卒業生が企画して再開してくれたんです。君も飲み会に来たかったらぜひ。



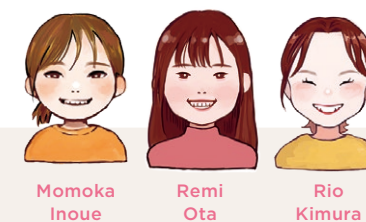
最近行ったゼミ生達との飲み会。仲睦まじい様子がうかがえます。

茨大関連施設にDIVE！

茨大のさまざまな関連施設を学生視点でレポート！

茨城県の北、中央、南の3ヵ所に所在する茨大の各キャンパスや関連施設の様子を学生視点からお届けします！ 今号では水戸キャンパス内にある「グローバルエンゲージメントセンター」に潜入。センターの取り組みと実際に国際交流する学生の姿をお伝えします。

茨大広報学生プロジェクトについて
知りたい方はこちら！



Momoka Inoue

Remi Ota

Rio Kimura

茨城大学と世界とをつなぐ窓口 茨城大学グローバル エンゲージメントセンター

▶ 学生たちでにぎわう
グローバルcommons

DATA 茨城県水戸市文京2-1-1

茨城大学の共通教育棟にあるグローバルエンゲージメントセンター（以下CGE）は、本学における国際交流の拠点として、国内学生と留学生の双方を支える役割を担っています。なかでも、自由に立ち寄り会話や交流ができる空間「グローバルcommons」は、キャンパス内での日常的な国際交流を生んでいます。さらに、オンライン上のTeamsにも同様の場を設けており、そこには留学生を含む1000人以上の学生が参加しています。

まず、本学の学生が海外との関わりを持つために、CGEではたくさんの短期海外研修を提供しています。多様な協定校があることで実現できるプログラムの幅広さ、そして学生が安心して海外に飛び立てる丁寧な支援体制が魅力です。もちろん、海外に行かなくても学内で国際交流を体験できる機会も充実しています。留学生とともに学ぶ授業や、オンラインで海外の学生

と共修できる授業が開講されています。

留学生に対する教育として、日本語教育や英語で受講できる授業、就職支援プログラムなど、日々の学習から将来までを見据えて広く展開されています。留学生を日常的に支援する仕組みとして、学生主体のサポート体制があります。留学生の学習面と生活面の両方を一対一で継続的に支える「個人チューター」、グローバルcommonsで場づくりと交流を担う「交流室チューター」、来日直後の生活を支援する「留学生サポート隊」など、さまざまな形で学生同士の関わりが生まれています。これらの活動は単なる支援にとどまらず、互いの文化や価値観を理解し合う機会にもなっています。また、国際交流会館（留学生寮）では学生主体で交流イベントが開催されており、授業外でも関わりが広がっています。海外協定校は年々増加しており、本学の学生の留



学先として多様な選択肢を提供しています。CGEでは、多様な協定校とつながるためにさまざまな取組をしています。その窓口となっているのがグローバルcommonsです。ここでの日常的な会話やささやかなやりとりの積み重ねが、学生一人ひとりの国際的な視野を広げています。CGEは、そうした出会いと関係性を育む役割を担い、本学の国際的な取り組みを支えています。

（談：池田庸子 教授／茨城大学副学長／グローバルエンゲージメントセンター長）



交流空間「グローバルcommons」で3組の留学生＆チューターに聞きました！

さまざまな言語、異なる文化を体験



ウクライナ国籍留学生
ヴィクトリア・グットニックさん
(2025年度後期から在籍)

地域未来共創学環3年
上山心夕さん

上山 昨日はヴィクトリアを含めた留学生30人で海浜公園に行ってネモフィラを鑑賞して写真を撮り、そのあとみんなで食事をしました。ヴィクトリアは、話す日本語が可愛いんです(笑)。それから、英語も韓国語も頑張ってる感じがすごいです。

ヴィクトリア 私は内向的な方なのですが、上山さんは話しやすいし、明るい性格で、一緒にいてとても楽しいです。

上山 チューターになることは、地元が茨城ではないので不安でしたが、やってみたら13か国の友達ができました。自分が行ったことのない国の話を聞ける貴重な機会だと思います。さまざまな言語を学べたり、異なる文化を体験をできたり。大学生活がいっそう充実すると思います。

漢字の添削がとても助かりました



スロベニア国籍留学生
ボフリン・モニカさん
(2025年度後期から在籍)

人文社会科学部2年
佐野虹架さん

佐野 グローバルcommonsで、課題の日本語を添削しています。あとは、旅行に行った写真を見せあい、休日に行った場所について話したり、地元のことを教え合ったりします。ここ良かったとか。モニカさんの方が水戸のことは詳しいです(笑)。地元を紹介する課題を手伝ったときに、ソーセージとジャガイモとキャベツの料理を題材にしていた、料理は日本と違うなと思いました。モニカさんがくれたチョコも食感が独特で、味はミルクがしっかりしていて、日本のよりも甘かったです。

モニカ クランスカ・クロバサという料理です。私は日本のお菓子が大好きです。スロベニアのもおいしいけど(笑)。漢字で書く多読のレポートは難しかったので、漢字の添削を佐野さんにしてもらったときにはとても助けられました。

互いの文化を受け入れる醍醐味



モンゴル国籍留学生
ガンボルド・フレズン・エルデネさん
(2025年度前期から在籍)

理学部4年
吉岡瑠偉さん

ガンボルド 同じサークルに入っていたのでそこで週に2回は顔を合わせていました。同じ学部なので、授業で分からないことがあったときに相談できるところが良かったです。

吉岡 私はこれまで個人チューターを5回経験していますが、何より留学生と心を通わせられるのが魅力です。文化の違いを感じることもありますが、話し合ってそこを乗り越え、互いの文化を受け入れられるのが醍醐味です。

ガンボルド 吉岡さんのサポートもあり、昨年10月に開催された国際交流パーティーではスタッフとして準備を担当しました。参加者として楽しい体験をしたので、今度は主催する側に回ってみたいと思ったのがきっかけです。それもよい体験になりました。

つながるイバダイバーズ

茨城大学の教職員たちが、リレー形式で執筆するコラムです。

第6回 | UAオフィス 吉楽 良平

AIを使って、人間が新しい学びや挑戦をするための「心の余白」を取り戻し、人のつながりを深めたい。

大学職員として働いていると、大学という場所が、教職員の「見えない時間」に支えられていることに気づきます。誰かが書類やデータと向き合い、迷いながら判断を探る時間。その地道な営みの一つひとつが、学生の学びや教育・研究の礎となっています。

私がAIに惹かれたのは、新しさへの憧れからではなく、日々の業務に埋没してしまった大切な時間を人の手に取り戻したかったからです。

これまで私は、生成AIを活用したツールの開発に取り組み、学会や他大学での講演発表を通じて、その可能性を多くの教職員と共有してきました。AI

は万能ではなく、人間の判断が不可欠な場面も多々あります。それでも現場の課題に合わせて丁寧に使えば、作業に費やしていた時間を、人と人が向き合う温かな時間へと変えられます。

私が生み出したいものは、最適化された業務フローではなく、その先に生まれる「余白」です。それは、誰もがアイデアを口にし、誰かの言葉をじっと待ち、人とのつながりを結び直すための「心の空き地」なのだと思います。

そうして生まれた余白の中で、私は人をつなぐ活動にも関わってきました。プライベートでは同僚とボードゲーム会を開き、学生のイベントを手伝うこともあり

ます。カードを並べ、駒を動かし、次の一手を迷う。その場では年齢や役職といった境界が少しだけやわらぎ、普段は見えにくい表情が見られるとともに、こわばっていた人間関係があたたく、しなやかに結ばれていく手応えがあります。

講演や学会もまた、単なる成果報告の場ではなく、私と同じように現場で悩み、大学を良くしたいと願う人たちとの出会いがあります。そこでの対話は、最後には決まって「AI時代に人間がすべきことはなにか」という根源的な問いへと行き着きます。私は、こうした本質的な対話にこそ、AIには代替できない尊い人間の営みがあると感じています。AIが担う仕事が増えれば増えるほど、人間にしかできない役割はむしろ鮮明になっていくのかもしれません。



AIによる効率化がもたらすものは、単なる「空いた時間」ではありません。人が心を開いて向き合い、新しい学びや挑戦の種を蒔き育てるための土壌です。私はこれからも、余白を通じて、学生や教職員が自分らしく考え、深くつながり合い、未来へ踏み出せる場を支える存在でありたいと願っています。

PROFILE

吉楽 良平 (きちらく りょうへい)

横浜市出身。明治大学卒。7月から大学の戦略・企画・評価を担う「UAオフィス」室員。Gemini認定教育者。ボードゲームの所有数は200超。2026年はスカイダイビングに挑戦予定。

IBADAI News Update

茨城大学の最新トピックをお届けします！

U23デフサッカーワールドカップに茨大生が出場。準優勝に大きく貢献。



U23デフサッカーワールドカップ準優勝のメダルを胸にチームメイトと。中央が教育学部1年の北川さん。

聴覚に障がいのある選手がプレーするデフサッカー。セルビアで開かれたU23(23歳以下)世界ろう者サッカー選手権大会(デフサッカーワールドカップ)に教育学部特別支援教育コースの北川慶悟さん(1年)

が出場し、日本の準優勝に貢献しました。北川さんは全試合に出場し、1得点を記録しました。

「試合を重ねるごとにチームの団結力が強くなっていったことが一番印象に残っています」。北川さんは大会をそう振り返ります。チームには「誇り・覚悟・団結・礼節・責任」という5つのアイデンティティがあり、「日本代表として戦う誇り」と「絶対に試合に出るという覚悟」を持ち続けたといいます。当初はベンチスタートでしたが、予選第4戦からはスタメンの座をつかみ、準決勝、決勝でも先発出場。試合を重ねるにつれて責任感も強まっていきました。

結果は準優勝。「自分たちは世界一を目指していたので悔しい気持ちの方が大きい」と率直な思いを語りながらも、「世界と戦えるという自信も得ることができた」と大きな収穫もありました。特に持ち前の

スピードには大きな手ごたえを感じた様子。積極的な一対一や相手背後への抜け出しなどで攻撃に勢いを与え、「スピードは世界でも通用すると感じた」と語ります。一方で「球際の強さや一瞬の判断、ポジショニングにはまだ差を感じた」と振り返ります。

競技以外でも貴重な経験がありました。ホテルでは海外選手と交流し、国際手話を使ってコミュニケーションを取ったそうです。「言葉や国が違ってても、同じデフサッカー選手としてつながれた感覚があり、とても楽しかった」と充実した様子。大会前に「口話にある言葉の壁を、手話では感じませんでした。国際大会でも同様の体験ができると思うと楽しみ」と話していて、その期待が現実のものとなりました。

将来は特別支援学校の教員を志します。聞き取りが難しい状況で集中を高めたり、推測を用いたりして話を理解しようとするリスニングエフォート(LE)の研究に関心を持ち、茨城大学へ進学しました。自身の経験を背景に、「LEをなくすために勉強

し、そういう経験をする子どもたちが取り残されないようにサポートしたいと思っています」。そして、「将来教師として、子どもたちに世界でもやっていけるんだと伝えたい」と語りました。



EDITOR'S NOTE

▶ 特集の取材で訪れた石巻市博物館は驚くほど真白なかわいらしい形の建物で、遠くから見ると大きな紙細工のよう。大阪・関西万博の大屋根リングを手がけた建築家の藤本壮介さんの設計だそうです。(広報・アウトリーチ支援室 山崎一希) ▶ 前号で紹介したコシアカツバメが今年も図書館本館に帰ってきました。鳥恐怖症の私は事務室に入るのも一苦勞。敵情視察のため、巢作りの過程を撮影するのが日課になりつつあります。(同 岡田佳那子) ▶ 第6号の学生ページ編集長を務めました、茨大広報学生プロジェクトの太田です。今回は日立・水戸・阿見のキャンパスにまたがり、物理的にも

約100kmに及ぶ広がりのある内容となりました。皆さまにあたたかく取材を受け入れていただき、茨大と茨大生が学内外の皆様に支えられていることを、制作を通して改めて実感しました。広報紙チーム一同、これからも邁進してまいります！ ご協力くださった皆さま、本当にありがとうございました。(学生ページ編集長 太田玲美) ▶ 毎号学生プロジェクトページに関わる学生の皆さんの熱心な姿勢に刺激を受けています。とくに今号では対面での編集会議を数回開催でき、よりよい紙面を目指す皆さんの意欲を直に感じることができ、幸せて充実した時間となりました。(編集・笠井峰子)

広報紙「IBADAIVERS (イバダイバーズ)」は、茨城大学ホームページからご覧いただけます。



紙面アンケートを実施しています。感想や次号で取り上げてほしい内容など、ご意見をお寄せください。

